

雨色
*
螺旋

1

——突然の雨。

真つ白に乾ききっていた舗道の上に、次々に大きな水玉の模様が広がっていく。

ふと仰ぎ見れば、さっきまでの晴天が嘘のよう。

どす黒い雲が空を覆い尽くして、見慣れた街並みをモノクロームに塗り変えていく。まるで、映画のワンシーンのように。

一本の線が二本、二本の線が四本。

また瞬く間に視界の全てを独占する銀の糸。

日曜日の歩行者天国を行き交う群衆の中から軽い叫び声上がる。

あちらのひさし、こちらの日よけパラソルの下。

回転ドアの外側で立ち止まっていた私の目の前にも、どんどん人垣ができていく。

——きつと、これは通り雨。少し待っていれば、やり過ごすことができる。

この場にいる誰もがそんな風に思ってるんだらうな。駅のホームで電車の到着を待っている乗客みたいに、みんなお行儀良く同じ方向を見てた。休日だけあって、若者の姿が多い気がする。ノースリーブに水玉、リゾートみたいな花柄。まだまだ流行の続く華奢なフリル。急速に冷やされた地面から吹き上がってくる風に、むき出しの素肌が凍えてる。揺れるピアスから、落ちるしずく。それもひとつのアクセサリパーツみたいだ。「すみませーん」

人波の中を縫うようにして前に進む。一番前列、ひさしの際のところまで来ると、私はバッグの中から折りたたみ傘を取り出した。

——ばつん。

弾ける音と共に広がったさくらんぼ色を、どれくらい目が見つめているんだらう。

そう思うと、ちよつと嬉しい。一步踏み出せば、ばらばらと打ち付けてくる雨粒。ミューールの足下を気にしつつも、私は颯爽と歩き出した。たくさんの視線を背中に感じながら。

日暮れからあとの時間帯が一番盛り上がるっていうのに、遊んでくれる相手もいなくてひとりぼっち。こんなはずじゃなかったんだけどなあ、嫌になっちゃう。本当なら今頃は浮き浮きとした足取りでライブ会場に向かっていたはずよ。そうだったのよ。

それなのに楽しみにしていた休日は始まる前に幕を下ろした。せつかく気合いを入れてお洒落もこれじゃ台無しよ。アキちゃんがいけないんだわ。アキちゃんがあんなことを言い出すから——

「ごめーん、ごめんっ！ 本当にごめんっ！」

開口一番。そんな風に平謝りされたら、誰だつてびつくりするよね？ まあ、最初からおかしいとは思っていたんだ。だって、申し合わせていた服装じゃないんだもの。せつかくライブだからテーマを決めて双子っぽくお揃いにしようって、昨日ふたりで何度も確認したでしょ？ だから帽子から足下まで、ゼーんぶ気合いを入れてきたのに。

「コバちゃんっ、ごめんっ！ このとおりっ、一生のお願いっ！」

待ち合わせはいつものカフェテラスだった。午前中、アキちゃんが英会話のレッスンを入れちゃったつて言うから、ゆつくりの待ち合わせにしたの。三時過ぎの店内は買い物帰りのカップルでいっぱいになっていた。

ようやく見つけた窓際の席で待っていたら、珍しく十五分も遅れてやってきて、とたんにこうよ。もうびつくり。

「ええと……、その。アキちゃん、一体どうしたの？」

先ほどからウエイトレスさんが、テーブルの側で困った顔をしてる。ようやくそれに

気付いたらしく、アキちゃんはハッと我に返って「アイスティー、お願いします」って言った。

その一瞬だけは顔を上げたけど、またすぐにテーブルに額をすりつける。なかなか綺麗にカールできないって嘆いてる金色の毛先が、肩先で踊ってた。

「ごめんっ、……そのっ。そのっ……、それが……」

話したい内容はとくに決まっているんだろう。でもそれが喉の奥に引っかかって出てこないみたい。なんか、普段とはちよつと違うな。アキちゃんとは職場仲間でいつも一緒。言いたいことをはっきり伝えてくれるから、とても付き合やすい女の子だ。きつと彼女の方も私のことをそう思ってくれてるはず。だから、お休みの日だって、わざわざ待ち合わせて一緒に遊ぶ。

うーって、喉の奥で呻いて。アキちゃんはどうやく顔を上げてくれた。そばすが多めで恥ずかしいって嫌がつてるけど、とつてもキュートだと思っよ。笑うと糸みたいになつちゃう目が、私をおどおどと上目遣いに見る。

「あの……、今日のチケット。……譲ってくれないかな？」

「え……?」

今更、何を言ひ出すんだらう。そんなにかしこまらなくてもいいのに。

夕方から始まるライブは公おおかけに宣伝してないシークレットっぽい奴だ。映画の主題歌を

手がけたことで一躍有名になったそのグループのことを、みんなが一度は生で見えてみたいと言ってる。それを私が偶然当てるたのね。何気なく応募したラジオ番組の抽選で。もちろん、当たった瞬間にアキちゃんとふたりで行くって決めてた。

「嫌だなあ、そんな他人行儀に。当然でしょ、一緒に行こうって言ったじゃない。ちゃんと持ってきたよ、見る?」

私はバッグのポケットから、ラジオ局の封筒を取り出した。オールスタンディングで、ドリンク付き。有名どころのインディーズとかデビュー間もないバンドが使う、中規模サイズのライブハウスが会場だ。ここからだ歩いて十分くらい、駅前のビル街を抜けて大通りを渡った向こう側にある。

にっこりと笑いかけたのに、アキちゃんはまだ浮かない顔をしてる。ちらちらとチケットと私の顔を交互に見て。その後、口を一文字に結んで、喉をぐくつと鳴らした。

「ちっ、違うのっ! ええと……、それっ、二枚とも譲って欲しいのっ! お願いつ!」

あんまり勢いよく頭を下げるから、アキちゃんは額をゴンとテーブルにぶつけてる。

その鈍い音があたりに響き渡ったちようどそのとき、タイミング良くオーダーの飲み物がテーブルに届いた。

「……」

しばらくはお互いに無言。そのうちに覚悟を決めたのか、アキちゃんはどうやく話を

再開した。

「あつ、あのねつ。午前中、英会話で樋口くんに会ってね。今日のライブの話をちよつとしたら彼も是非行きたいなつて。ダフ屋とか出てないかなーつて言うのよね。だから……、その、……つい。一枚余つてるよつて、言つちやつたの」

——そんな、馬鹿な。

当然そう叫んでもいい状況よね。だつてさ、信じられないよ。チケットを当てたのは私なんだよ、これがアキちゃんのチケットなら諦めるけど……そうじゃないでしょ!!? だけど私は言えなかつた。アキちゃんの目があまりに真剣だつたから。それに、いきなり「樋口くん」つて名前が出てきたのにも驚いちゃつて。

樋口くんというのは、最近派遣で入つてきた男の子。今年大学を出たばかりと言つてたから、年令は私やアキちゃんよりひとつ上になる。でも社会人としては私たちの方が先輩。何だか面白いねつてことですぐに仲良くなれた。とにかくデータ処理が速くて、どんなに大量でも隣く間に終わらせちゃう。私たちが丸一日かかるような仕事もほんの二、三時間でこなしちゃうんだから、もうびつくりよ。とても頼もしい反面、私たちがお払い箱になるんじゃないかと不安になるわ。

でも、どうして樋口くんがアキちゃんかと? そこにも大いに引つかかつた。だつて、どう考えても私の方が彼とはいい感じだつたんだよ。まだ実際にツーショットしたこと

はないまでも、色々誘われたりしてたんだから。

そりゃあさ、結構好みだつたもの、彼。このままいけば、もしかしたらつて思つてたけど、なかなかタイミンクが合わなくて。最初に映画に誘われたときには、同じのをアキちゃんと観る約束してたし。ご飯を食べに行こうつて言われたときにも、先に彼女との予定が入つてた。

私は当然のようにアキちゃんを選んできたのに、アキちゃんの方はそうじゃないんだね。しかも樋口くん、気のある素振りをするのは私に対してだけじゃなかつたんだ。な〜んだ、期待して損した。

「ごめつ、絶対にあつて埋め合わせするつ! だつて運命感じたんだよ、樋口くんが偶然同じ英会話スクールに来るなんて! 彼と上手くいきたいの。今まで言えなかつたけど、ずっとチェックしてたんだから……!」

何よそれ、ひどすぎない? そんなの絶対に許さないつて、言いたかつた。……でも、やつぱり言えなかつた。

自分の思つたこと、きちんと口にてできるアキちゃんがすごくすくすく羨ましい。そして、そんなアキちゃんに私は心底信用されて頼られてるんだ。アキちゃんは大切な友達。これからもずっと仲良くしたい。もしも、私がここで断つたら、この先のふたりの関係に亀裂が入る。

「いいよ、頑張つて。朗報、待つてるから！」

馬鹿だよ、私。本当に大馬鹿だ。

頬に貼り付いたままの笑顔でアキちゃんとは別れたあと、大声で泣きたい気分だった。——でも、それより先に、空が泣き出してたんだ。それがやけに悔しくて、何もかもが嫌になつてた。

あーっ、思い出していたら、また落ち込んできちゃった。やつぱりあれつて、いい子を気取りすぎた私がいけないんだよね。同じことなら彼女の前で爆発しちゃえば良かった。その方がどんなにすつきりしたことか。

地下鉄の入り口までは、普段なら五分。でも土砂降りの天気は今だともう少しかかりそう。

雨はますます強くなつて、一向に収まる気配はない。今朝、天気予報図を見たときに、もしかしたら来るかもしれないなつて予感がした。あの前線の配置だと、局地的に大雨になる恐れがある。それがどこか、いつかつていうのは、風向き次第だから何とも言えないんだよね。

この雨、きつとやまないよ。もしかしたら明日の朝まで続くかも。雨宿りをしている人たち、いつになつたらそのことに気付くんだろう。

夏至直前だから、五時過ぎでもまるで昼下がりにみたいに明るかった。あーあ、このまま真つ直ぐに部屋に戻るのも、情けない。かといつて今から新たに誰かを呼び出すのも面倒だなあ……どうしよう。

「……あれ？」

そんな風に考えつつ、駅前のスクランブル交差点のところまで来たら。

不意に目の前を、休日の風景に不似合いなスーツ姿が横切つた。その横顔をちらと確認したとき、思わずそんな声が出る。でも絶え間ない雨音にかき消されて、それは相手までは届かなかつたようだ。

そのまま、遠ざかる背中。傘がないのかあるいは差す気がないのか、いつもとはかなりイメージの違う淡い色合いの肩先がしつとりと濡れている。近頃のスーツは性能良くできていて、撥水加工もデフォルト。そうはいっても、ものには限界というものがあるんだらうね。ここまで濡れになる状態はさすがに想定しないし、その必要もないだらうし。

——雨は不思議。普段は忘れてはいるはずの気持ち呼び起こしてしまふ。心の一番奥、決して開けないように封印していた禁断の扉が静かに開いていく。イイコの仮面が外れる瞬間。滝壺のように吹き上がる水煙。その向こうに消えかけた背中を、私は早足で追いかけた。

雨はますます強くなってくる。
前を行くスーツの彼の足取りは重い。きつとあれじゃ、靴の中だつてぐしょぐしょになつてると思うよ。それにどこかを目指して歩いてるっていうのともちよつと違う。

——営業部の木原さん。

まあ、ウチの会社は派遣社員やバイトを含めても三十人足らずだから、男性社員のほとんどは営業職だと言つてもいい。それぞれに担当はあれど、仕事が外回りなのは皆一緒。人によつてはちよこちよここと私の所属する庶務に顔を出すこともあるけど、木原さんはそんな感じじゃないし。一年以上同じ職場にいても、ひとことふたこと挨拶した記憶しかなかったりする。

同じ営業にいたる男の子に聞いても、あまり付き合ひ良くないって。だからこそ、彼は噂の人なのだ。淡々としているようでいて、いつも営業成績はトップ。愛想のない鉄仮面みたいな顔をしてどんな風に顧客の心を掴んでるのか、謎が謎を呼んでる。

二ヶ月ほど前、仕事仲間のエミちゃんが、彼に惚れ込んで突撃したのは有名な話。私よりもひとつ年下の彼女は、「いかにも」男受けしそうな雰囲気で、とつても可愛い。だからみんなで期待してたのよ、これで色んな話が聞けそうだなって。若い子たちだけじゃなくて、お局様ぼろやまって言われてる大先輩もお掃除のおばちゃんもわくわくしてたわ。それなのに、三秒で振られちゃつたって言うから、がっかりよ。

パソコンの社員データを穴が空くほど眺めても、やっぱり彼は独身。いや、独身っていったつて色々あるし、書類上のことだけで何とも言えないんだけど。とりあえず今現在、戸籍上はフリーってことよ。それなのに、エミちゃんを三秒で。私が木原さんだったら、フタマタになつたつていいからご飯くらい食べに行っちゃうと思うけどな。うーん、もつたいない。

年齢は二十八歳。でも入社三年目。その前は派遣会社に登録していたらしい。どういう成り行きかはわからないけど、この中途採用は異例中の異例だつたつて聞いている。私も短大を出て今年で二年目。彼よりあとから入ったから、その頃のことは当然知らない。

——あれ？

そんなことを考えていたら、木原さんは駅前の大時計の前で足を止めた。そして、水滴がびつしり付いた文字盤をゆっくりと見上げる。しばらくその格好のまま固まつてるなど思つて見守つていたら、そのうちに肩を落としてまたとほと歩き出した。そして、また少し行くと振り返つて反対側から時計を見上げる。大きく水飛沫みずしぶきを上げながら、通りを車を走り抜けていく。遠ざかっていくテールランプ。

木原さんつて学生時代は何かスポーツやつてたのかなつて、職場で話題になつたことがある。柔道つていうほど逞たくましくないけど、結構上背もあるし。一度だけ上着を脱いだ姿を見た誰かが言つてた。あのガタイは絶対にきちんと鍛えたものだって。

いつもびしっと手入れの行き届いたスーツに、顔が映るくらいピカピカに磨いた靴。ちらりと覗くワイシャツだって、びっちりプレスされてる。ズボンじわとかも全然ない。だけど今、その揺るぎないはずの肩先が雨に濡れるままになってる。

心をどこかに置き忘れたみたいだな、そんな気がするのはどうして？ もしかして、木原さんって双子だったりするのかな。あそこにいるのはうり二つの弟の方……じゃないよなあ。家族の欄にもそんな記載なかったし。

立ち止まったままの背中を真っ直ぐに見つめながら、私は彼のすぐ後ろまで辿り着いた。

「こんにちは」

とりあえず、そんな風に声をかけてみる。案の定、彼はものすごくびっくりした顔で振り向いた。額から落ちる雨粒、髪も濡れてぐちゃぐちゃになってる。大きく見開いた目が、私をじーっと見つめた。だけど、その焦点がきちんと定まってるみたい。それを裏付ける、ものすごいアルコール臭。

「え……、君……誰？」

うわあー！ こんな時間に、もう出来上がっちゃってるの？ そんな私の驚きは、彼の言葉でさらに大きくなった。「誰」って、その、「誰」はないでしょう。一応同じ「望月商事」の社員だよ。庶務にいるんだから顔ぐらいは知っててもいいはずよ。備品の管

理とかで、営業部にだってしょっちゅう出入りしてるじゃないの。何よー、いくら何でもひどくない!?

「ええと、その……まさか」

次の瞬間、彼は思わぬ行動に出た。傘の下で後ろからの風に舞い上がった私の髪を彼の指が素早く絡め取る、何かを確かめるように。でも、びっくりするでしょ、それって。慌てて飛び退いたわよ。そしたら――

――ずる。

「え……!?!」

彼の方もそりゃ驚いたと思う。そのあと彼は後ずさった拍子にちよつと足を滑らせて、もうちよつとで水たまりに尻餅をつくところだった。必死で踏みとどまったあと、信じられないという面持ちで自分の手を確かめる。そこにはだらりと下がった髪の毛の束。正確にはさつきまで私の頭にくっついてたロングのウィッグだ。ピンで留めた帽子も一緒に。何ともはや、気まずい沈黙。ふたりの周りを取り囲む銀糸のヴェール。

雨はまだまだやみそうになかった。

一番嫌いなのは、いつも格好つけちゃう自分。

言いたいことがあるならさちんと言えはいいのに、ついつい相手に合わせてやり過ぎ

してしまふ。そんな風にして、蓄積されていった後悔は数え切れないほど。もう駄目、やめようって思つても、やっぱりその場になるとついつい、なんだ。

——もう、そんなのはたくさん。私は今日から生まれ変わるんだから。

昨日はアキちゃんが相手だったから、言いたいことも我慢しちゃつた。でも、今度は大丈夫。絶対にいける、いってやる……!!

熱いシャワーを全開にして。頭に突き刺さるその感触を楽しんでいた。いいな、ウチのアパートだと、水圧がイマイチでなんかすつきりしないんだ。うーん、極楽極楽。せっかく備え付けなんどもの、何度でも使っちゃうわ。

これまた備え付けのふわふわバスタオルで念入りに身体を拭いて。さっきまでのバスローブに替えて、からりと乾いた昨日の服を着る。うーん、思つてたとおり空調も完璧。イマドキのシテイホテルつてすごいね。それに驚いたことにフロントで二十四時間いつでもクリーニングの受付までしてくれる。日付が変わる前に出すと早朝には仕上がるって、かなり使えるサービスだと思う。

パウダールームでメイクを終えてから、部屋に戻る。

午前五時でもこんなに明るいんだ、びっくり。カーテンの向こうはもう夜が明け始めている感じ。よし、ここはひとつ威勢良く起こしてあげよう。

「木原さん、……木原さん。朝ですー！ 一度、家まで着替えに戻らなくちゃならないでしょうから、もう起きた方がいいと思いますよ？」

ざざざとカーテンを開いて、振り向く。

ダブルサイズのベッドの上、盛り上がってた毛布がもぞもぞと動いた。ふふ、可愛い、猫みたい。やがて、ほんやりとした表情の彼が顔を覗かせた。いつもの鉄仮面からは想像つかない無防備な表情。身につけてるバスローブは胸の前が派手にはだけてる。

「う……んっ……」

まだ、完全には目を覚ましてないみたい。何度も隣そばきたり、目をこすったり。あまり経験のあることじゃないけど、寝起きの男の人ってホント可愛いなっと思うわ。

「……え、ええと」

やっと目の焦点が合ったのかな。呆然とこちらを見つめる彼。応えるように、にっこり微笑んであげた。これでよし、今のところは余計な情報を与えないの。

「木原さん、じゃあ私は先に行きます。昨日のスーツ、テーブルの上にクリーニング済みで置いてありますから」

手にしたバッグ。外したウイッグの分だけぷっくりと膨れる。慌てて身を起こして何かを言いかけた彼を振り切つて、私は部屋の入り口まで足早に移動した。ドアレバーに手をかけたときに、もう一度振り返る。彼はまだベッドの上、口をOの字に開けてこ

つちを見ていた。すつごくおかしい。この顔を写メに撮っておきたいわ。ぱたん、と閉じたドア。カーペット敷きの長い廊下を、私は軽やかな足取りで歩き出した。

2

「おはようございまーす！」

駅から歩いて五分、雑居ビルの三階。運搬用のエレベーターを除けば、ここに至る手前は階段のみだった。入り口のビル管理室のおじさんに、そして階段を上がりながらすれ違う別の会社の人に、合計三回挨拶をする。

朝は好き。こうやって声をかけながら誰かとすれ違うことができるから。就業時間中はお互いに気ぜわしくて会釈くらいに控えてしまう。何となく気まずいあの空気が未だに慣れない感じ。

「おはようございまーすっ！」

奥から二番目のドア、そこを開けて私は四回目の朝の挨拶をした。今までで一番元氣よく、ね。

「コバちゃん、おはよーっ！」

入ってすぐ、パーティションで区切った一角が、私の仕事場。「庶務」って呼ばれてる。ウチは本当にちっちゃい会社だから、ここで経理から事務から何でもするの。何しろ、社長自らが仕入れに出かけちゃうくらいなもの。

入社するまでは正直「事務職」っていつても具体的にどんな仕事をするのかわかっていなかった。そして、入社して一年以上が経過しても、やっぱりよくわかっていない。学生時代の友達に聞いても、会社によってその内容は千差万別。大きな会社になると、経理だけで一部屋あるって聞くし。

今、声をかけてきたのは副社長。何故かここにデスクがあるのよね。糸の切れた風呂みたいに全国津々浦々出かけてしまう社長に代わって、会社をしっかり守ってる「おかみさん」のような人だ。わからないことは何でも教えてくれるし、その指示の仕方も的確。本当に助かってる。

副社長の大きなデスクは一番窓際、窓を背にこつちを向いて置かれている。そしてその手前のスペースに、向かい合わせにくつつけた机が四組並んで島を作っていた。全部で八つあるデスクのうち埋まっているのは約半分。私は奥から二番目の自分の席にバッグを置いた。

『昨日はありがとう！ ゴメン、詳細はあとでね〜☆』

ふと見ると、片隅にモノクロでキヤラクターが印刷されたメモが書類の間に挟まっていた。それをつまみ上げたとき、右の席に座ってるアキちゃんが一瞬だけこっちを見て「にっ」って笑う。でも、それは一瞬のこと。彼女はすぐに自分の仕事に戻ってしまった。

ああ、アレね、「地獄の捺印」。彼女の手元では、目にもとまらぬ早業で次々と印が押されていく。一枚に何ヶ所もの捺印箇所があつて、しかもひとつの書類が三枚綴り。そういうのつて、めくるだけでも大変なのよね。シャチハタのときには手首を痛め、朱肉を使えば指先がぎりぎりいう。週明けのせいかな、ものすごい量。これじゃあ、お昼までかかっても終わるかわからないわ。

——でも、まあ。出社したとたんに、あれこれと結果報告されるよりは良かったかな。椅子に座ると、樋口くんの席はちょうど目の前。まあ、彼の机にはデスクトップパソコンのディスプレイがどーんと置かれてるから、マウスを動かす腕くらいしか見えないんだけど。

なんか不思議。こうしてると普通の週明けと全然変わらないよ。こうして斜めの位置に座っているアキちゃんと樋口くんが昨日の晩ふたりだけで出かけたなんて、黙ってたら誰も気付かない。私、社内恋愛とか、もつと構えて考えてたような気がする。こんなに簡単なことだったなんて、ちょっと拍子抜けかな。

ま、ごちゃごちゃ考えてないで、仕事仕事。うわあ、こっちは会議用の資料だ。しか

もこの手書きのミミズ文字は社長のじゃないっ！ ちょっと待ってよ、これを読みやすくまとめるのつて一苦労なんだけど……

「あー、コバちゃん。それ、午後からの会議で使うから急いでね。いつもみたいに、あまりひどい場所は空欄にしとけばいいからさ。そのあとは、お得意様へのお中元の宅配伝票と熨斗書き。熨斗書きは今日中ね」

まるでそれまでの私のリアクションを全て眺めていたかのように、ジャストタイミングな副社長のひとこと。ひいひいっ、待ってよ！ そう叫びたいのはやまやまだけど、ぐぐぐと堪えてとにかくノートパソコンを立ち上げる。

全く、誰よ、「書の達人のコバちゃんなら、社長の草書体も楽々でしょ？」とか言い出したのは。それからというもの、社長が下書きした書類を打ち込むのはいつも私の仕事になってしまった。趣味で続けている書道のおかげで就職先にもありついたけど、やっぱりお給料を頂くのつて大変。げんなりするほどのミミズ文字を見るたびにそれを実感する。

さーて、と。

いつものクセで、こきこきと首を回す。最初からこうやって軽くストレッチしてほぐしておく、長時間同じ姿勢でも負担が少ないのよね。肩こりなんて、おばあちゃんがるものだとばかり思ってた。それがどうよ、今では長い棒の先にゴム鞠みたい

なのが付いてる肩たたきとか部屋に転がってるよ。職業病だから仕方ないんだろうな。急ぎの仕事だどついつい無理しちゃうし。

——あれ？

そこまできて、私は自分の身体の違和感に気付く。なんか、何というか……そう、高級エステを体験したあとのように全身が軽い。いえ、そんなの実際にはやったことないけど、ものものたどとしてよ。すぐさま、記憶をぐるぐると巻き戻して原因を突き止めた。

そうか、あの枕のせいかも。

ホテルのベッドの枕は何の変哲もない真つ白な大きい奴だったけど、これもー最高に気持ちよかった。寝付きの悪い私が、横になったとたんに爆睡できるほどの心地よさ。あれっでもしかして、特別な品物なのかな。そうよね、シテイホテルには結構なお値段だったもの。その辺でリッチにしているのかも。

キーボードに指を置いて、思わず、くすつと笑ってしまった。

すぐにハツとして横目で隣を見ると、アキちゃんはこちらのことなんて気にする暇もない勢いで、印鑑を押し続けていた。

「できましたーっ！ チェックお願いします」

正午を告げるチャイムがビル全体に響き渡ってから、さらに十分が経過。私とアキちゃんとはほとんど同時に叫んでいた。そのあと、顔を見合わせて笑っちゃう。アキちゃんの方は別に午前中に仕上げる必要はなかったんだけど、私に付き合ってくれたんだ。

はー、ミミズ文字の解説と簡単な文章レイアウトだったけど、やっぱり疲れたな。でもちっちゃい、ひとつひとつのこんな達成感がたまらない感じ。きつとアキちゃんも同じような気持ちだよな。

「ふふ、お疲れさま。でも、チェックが済んだら、急いで十組ずつコピーをお願いね。会議、一時からだから」

……あらら。

お局様のつぼねさまにこやかな言葉で、私たちのランチタイムは後回しになることが決定。まあ、全員がいっぺんに留守にすることはできないから、普段も入れ替わりで食事に出るんだけどね。

ま、いいや。少し時間がずれた方が案外すいてるかもしれないしね。そう思って振り向くと、アキちゃんの口が早くもぱくぱくと動き出していた。

「……ふうん、楽しかったなら良かったじゃない」

みんなが出払った部屋でコピー機の唸る音を聞きながら、私はアキちゃんの昨日の報

告を延々と聞いていた。最初は申し訳なさそうに、でも嬉しさを隠せずにぼろんぼろんとこぼれ落ちる言葉。いつもよりも赤く染まってる頬が、とても幸せそうに見えた。

「うーん、そう言われればそうなのかなあ。でもねえ、次の約束とかもなかったし。その辺が拍子抜けかなあって」

そう言いつつも、やっぱり顔が笑ってるアキちゃん。本当は朝イチでしゃべりたくて仕方なかったんだろうな。気になっていた男の子と思いがけずにツーショットして、そのあと晩ご飯まで食べた。そういうのって、普通に「デート」って言っていると思うよ。「またまた、気のない相手と一緒に出かけたりはしないでしょ、普通。しばらくしたら、また気軽な感じで誘ってみればいいのに」

コピー機はあつという間に仕事を終わてくれた。ナンバリングどおりになっているかを確認してから、左上をホチキスで留める。慣れてしまえば五分とかからない仕事。

——不思議だな、って思った。

だって、私は確かにあの瞬間とても落ち込んでいたんだよ。アキちゃんの口から思いがけず樋口くんの名前が出て、あんな風に奪い取られるみたいにチケットが手元から離れて。そりゃ、どうしてもって思い詰めるほど行きたかったライブじゃない。だけど、やっぱりいい気はしなかった。

それなのに今、私はとても落ち着いた気分でアキちゃんの話聞くことができている。

少しぐらいは動揺しちゃうかなって不安だったけど、全然そんなことないの。こんなに素直な気持ちで友達の恋を応援できるなんて、なんかいいな。「樋口くん、ほうれん草が苦手なんだって」とかどうでもいい話も、笑顔で聞くことができるよ。

入社して、アキちゃんとこんな風に仲良くなってる。今までずっとふたりともフリーだったけど、いつかはこんな日が来るかもって思ってた。

どんなに仲良しでも、やっぱり彼氏ができると色々変わってくる。お休みの日も一緒に遊べなくなるし、メールとかの内容も彼とのことばかりになっちゃって。そんなのは小学生の頃から何度も何度も経験してる。そして、だいたいその友達とはそれっきり疎遠になることが多かった。

今回もそうかなって、そう思うと寂しいけどね。でも、思い切り応援しちゃおうと思える。私って、偉いな。

「これからも、相談に乗ってねっ！　こういうのってあんまり社内では広めない方がいいと思うから、絶対に内緒にしてよ。特にお局（ぼほ）レイちゃんとかにはっ！」

何だか、今日の私ってオトナ。アキちゃんの言葉ににこにこ頷いてた。

「あ、……コバちゃん？」

と、そこに一足早くランチを終えた一団が戻ってくる。一番先に入ってきたエミちゃ

んが、私に声をかけてきた。今日はピンクのワンピース。特に制服もなくして堅苦しい服装の指定もない職場ではあるものの、エミちゃんの服はいつでもオフィスタイルの許容範囲ギリギリって感じ。だけど、小花模様がすっごく似合っていて嫌みがないのよね。「あのね、コバちゃんにお客さん——」

パーティションの影。いつからそこにいたんだろう。エミちゃんの視線の先に、ダークグレイのスーツをぴしっと着込んだ「彼」が立っていた。私と目が合うと、するっと顔を背けてしまう。その横顔に、あの寝起きのほんやり顔の面影はない。どっから見ても、隙がない感じ。私や他のみんなが知ってるいつもの彼だ。

——ああ、やっぱり来たわね。

正直、朝からずっとドキドキしてた。あんな別れ方をしたんだもの。行きずりならともかく同じ会社の人間だってわかってたら、絶対に向こうからリアクションを起こしてくるはずだって思ってた。だけど、朝から彼の姿がどこにもなかったから、ちよつと拍子抜けだったのよね。

ウチの会社、入り口のドアを開けて目の前が私たちの部署だから、出入りする人間は残らず把握できる。取引先の業者さんがアポなしでいらつしやることも結構あるから必ずチェックするようにしてるのよね。失礼があったらいけないし。そのためにお局様のレイカさんの席が一番手前になってる。彼女なら取引のある業者さんのほとんどの顔と

名前を把握してるから。

パソコンの画面と社長のミミズ文字を交互に見て打ち込みつつも、ドアが開くたびにそっちを気にしてた。まあ、営業さんなんだから直接家から外回りに出してしまうことも多いし、遠出のときには丸一日顔を見せないのも珍しくない。だから、もしかしたら今日もそういう日程なのかなって思ったんだけどね。もう、アキちゃんと樋口くんのことなんて、気にかける余裕もなかったの。

何だろう、私すごくわくわくしてる。心の中で打楽器が一斉に打ち鳴らされている気分。「……………え？ 木原さんが、どうして？ コバちゃん、何かミスった……………!？」

彼の姿を確認したアキちゃんは、きょとんとした顔で私を見る。ふふ、驚くのも当然よね。だって、昨日の夕方までは、何の接点もなかったふたりだもの。それにしてもストリートだなあ。きつと人目を気にしてこそそつとコンタクトを取ってってくると思ったのに。

まあ、いいやと、そちらに歩き出した「彼」のあとに続こうとした私の腕をエミちゃんががしつと掴んだ。何事かと振り向くと、彼女は今にも吹き出しそうなギリギリの感^{かん}じで訊ねてくる。

「ねえねえ、どういうこと？ 木原さん、言ったのよ。『あそこにいる、髪が長い方の彼女をお願いします』って……………普通、そんな言い方するっ!？」

キヤバラの品定めじゃないんだからさ、とか何とか。まだまだ話し足りないを置いて、私は消えていく背中を昨日と同じように追いかけた。

「あの……、何かご用でしょうか？」

このまま声をかけなかったら、どこまでもどこまでも直進しそうな勢いだった。とはいえ、もう彼のすぐ前は行き止まりの壁。左にはいつものようにみんな出払ってる営業部。何かの処理をしているのか、一台のパソコンだけが、ジージーと音を立ててた。

私の問いかけに、彼はびたっと足を止める。そして、振り向きながらこう言った。

「君……、朝倉さんって名前だったのか」

……は？

何て言ったらいいのかな。学校の先生が生徒の名前を確認するみたいな言い方。彼の声には寸分の乱れもなくて、その表情もほとんど動かない。

「皆から『コバちゃん』って呼ばれていたから、小林さんとか小幡さんとかだとばかり思ってた。でも、社員名簿にも載ってないし……」

きっちり結ばれたネクタイは斜めのストライプ。モスグリーンに細めのグレイが入っている。どうしたらこんなに完璧に仕上がるのかしらと思っちゃうくらい、綺麗だ。デパートのディスプレイみたい。

「あ、……ええと。すみません、朝倉小鳩ですっ！」

別に謝る必要もないのに、ぺこりと頭を下げてしまった。そうなんだよなー。どういうわけか「こぼと」という名前の上の二文字で「コバちゃん」って呼ばれてる。ちなみにアキちゃんも本当は「秋音」ちゃんだし、エミちゃんも「絵美奈」ちゃんっていう。どうもそれが社長の趣味みたいなのよね。

ああそうかって、頭を下げつつ思った。

もしやとは思ったけど、やっぱりこの人私の名前を知らなかったんだ。そういえば、昨晚一度も呼ばれてないもの。思い返してみても、ずっと「君」とかだったような……改めて考えてみるとすごく失礼だわ、だからエミちゃんにもあんな頼み方をしたのね。

「いえ、こちらこそ。——木原翔です」

そう言いつつ、何故か名刺を取り出して差し出す彼。おいおい、そんなことするかな、と思いつつも反射的に受け取ってしまった。そうなのよね、このアイドル歌手みたいな名前も「謎」のひとつ。「誠」さんとか「敦」さんとかって昔ながらのイメージなのにね。どう見ても「かける」さんって顔じゃない。

「ああっ、……そうそうっ！」

四角い厚紙をほんやり眺めていたら、ハッと気付いた。顔を上げると、彼がびくっと肩を震わせる。でもまたすぐに、元どおり。立ち姿も全然崩れていない。

「あのっ、すみませんっ！勝手にスーツをクリーニング出しちゃって。精算は最後までいいって言われたから、そのままにしちゃいましたけど……お支払い、大丈夫でしたか？」
 そうそう、そうだった。

フロントで「お名前を」と言われて、指定の用紙に彼のフルネームを書いたんだった。自分の名前を書くのもどうかと思っただけ。だって、雨に打たれてボロボロのよれよれ。とてもただ乾かしただけでは復活しそうになかったんだもの。しかもよくよく見たら、ワイシャツも合わせてネーム入りのオーダー品。量販店の品物じゃないから、丁寧に扱わないと、とか思ってた。

「あ、ああそれは。カードで払ったし、大丈夫」

すっきりとした表情でそう告げる。まあ、そうだとは思っただけ。全く持ち合わせもなく大の男が歩いているのも変だしね。でもそういう些細なことで逆ギレする男もいるもの。名刺の次に領収証が出てきたらどうしようかと思っちゃったよ。

「そうでしたか、なら良かった」

にっこり微笑み返してみただけ、木原さんはこちらをじっと見つめたまま。それもドキドキしてるとか、何か不安を抱えてるとかそういうんじゃない、ただ私が動いているのが不思議だって思ってるみたい。

こんな風に呼び出すんだから、単刀直入に来るかと思ったのに。なーんだ、面白くな

い。もしかして、こっちが切り出すのを待ってるのか？ やっぱりできる男はそのくらい計算高いのかな……。あり得る、あり得る。おなかの中では色々考えつつも、私は努めて穏やかな表情のまま言った。

「お話、終わりでしたらよろしいでしょうか？ これから、昼休憩に出ますので……」
 受け取った名刺をきゅつと握りしめて、私はくると彼に背を向けた。今朝、部屋に戻ってから念入りに内巻きカールした髪が頬につんつんと当たる。今日はグリーンのストライプのブラウスに、フレアミミニのスカート。同じショップでセットで買ったからぴったりだ。

——馬鹿にしないでよ。私は些細なことできゃんきゃんわめくお子様ではないんだから。言いたいことがあるなら、自分から言いなさいよ。そんな気持ちで肩先に集中させて。「あの」

すたすたすたつて、ちょっと大股で遠ざかったら、十歩目のところで、ようやく彼が声をかけてくれた。頼むよー狭いエリアなんだから、すぐに反応してくれないと、あつという間にアキちゃんたちが心配そうにこっちを覗いている場所まで戻っちゃう。

「ええと、その」

スカートの広がりや計算に入れながら、ゆっくりと振り返る。彼の瞳が一瞬だけ揺らぐのが見えた。何にも答ええないで、じっと視線を合わせる。静かに静かに、釣り糸を引

き上げるみたいに。

「昨日の晩、俺は君と……?」

控えめな声の語尾が上がる。ふたりの間に張りつめた空気、それが信じられないほど心地よい。私は何度か瞬きを^{まばた}したあと、小さく息を吐いた。

「やだ、……覚えてないんですか?」

そして、次の瞬間。

ようやく、私が待ち望んでいた反応が現れた。彼の顔が、さーっと青ざめていく。青白くなつていく頬、そこがかすかに震えて。

「え、……そのっ。……あの、何となくは」

もう十分だと思った、これだけで上等。ちようど、そんな風に思ったときに、どやどやとたくさんの足音が廊下をやってくるのが聞こえた。そろそろランチタイムも終わるだ。急がなくちゃ。

「いいです、もう」

悲壮感がべつたりと貼り付いた顔をもう一度見据えてそう告げると、私は再び彼に背を向けて歩き出す。二度と、振り返らなかつた。

3

当然といえば当然だけど、彼との話を終えて戻ってきた私に、アキちゃんとエミちゃん嬉しそうに飛びついてきた。

「ねえねえ、一体何の話? ちょっと、深刻そうだったよねっ!」

何しろ、木原さんの方から私たちに声をかけてくることなんて本当に稀^{まれ}なもの。不思議に思うのも無理はない。

「うーん、大したことじゃないってば」

ここで真実を告げたら、一体どんな反応が返ってくるだろう。ふたりの呆気にとられた顔を想像するだけですごく楽しい。……でも、それはちょっとお預けね。美味しいところはあとに取っておかなくちゃ。

「この前頼まれて揃えた資料がね、一部抜けてたんだって。そのクレームだよ」

口から出任せの言葉なのに、ふたりはいともあっさりとな納得した。「ああ、そうよね。彼って、そういう失敗を見逃さない感じー」なんて頷き合ってる。疑いなんて微塵^{みじん}もない様子で。そうだろうな。私だって彼女たちの立場だったら、同じように思ったはずだ

もの。

「じゃあ、アキちゃん。早くランチ済ませちゃおー」

——水面下で、進行中。

そういうのもスリリングでいいなと思った。

さりげなく話を昨日のことに持っていくと、アキちゃんはすぐに食いついてくる。木原さんのことなんてその瞬間に全て忘れ去ってしまったみたい。動き続ける口元には、いつもよりも念入りにルーージュがひかれていた。明らかに誰かを意識してる、そんな感じに。知らなかった。アキちゃんが樋口くんのことをここまで意識してたなんて。昨日の今日とはいえ、一挙一動までよく覚えてるよなあ。あんまりにも詳細に話してくれるから、昨夜のふたりのやりとりをそのままDVD再生してるみたい。どうでもいいような、でもアキちゃんにとってはとても重要なことが延々と続いていく。

でも、そういうものなのかも。誰にだって、大切なものはある。絶対に譲れないほど守りたいもの。そして、それはひとりひとり、全く違うんだ。

木原さんのことはね。ホントのところちよつとついで楽しんでやろうってくらいだったの。彼が普段は絶対に見せない姿で目の前に現れたでしょう。だから、そのとき閃いたの。彼が正気に戻ったときに、必死に取り繕う様子を見てみたくなって。

だけど、それだけじゃ済まなくなつたみたい。思ってたよりもずっとずっと彼は慎重だ。

すぐに尻尾を出すと思っていたのに、どこまでも冷静を装って、きつと頭の中では色々と分析しているのよね。自分はどこまでわかっていて、何が疑問点なのか。きちんと整理した上で、次の行動に出ようって考えてるんだ。そして考えても答えが浮かばないときは、私にしゃべらせて情報を得ようって魂胆なのね。そうに決まつてる。それに気付いたから、もう容赦しない。

——彼にとって、私は爆弾。いつどんな風に破裂するかも予期できないままに、不安を募らせる対象物。ドキドキハラハラと見守られるのも、悪い気はしない。絶対このままで済まされるわけがないもの。また次の手を考えて、仕掛けてくるはず。でも、それは私も同じよ。さて、この先はどんな風に進めましょうか？

社長のすごいところは、何でも自前でこなそうとするとところだ。あのフットワークの軽さは確かに尊敬に値する。ただそれを部下にまで押しつけるのはどうかと思うのよね。昨日のスポーツ新聞を広げた社長のデスク。私は精神統一をはかるために、必死で墨をする。墨汁を使ってもそれこそ筆ペンだつて構わないんだけど、私はこの作業が好き。何度か小筆にとつて色を確認しつつ、繰り返し返す。この際色気は無視して、エプロンに腕カバー。墨がはねたら落ちないもの。ここは慎重に慎重に。

季節ごとのご挨拶。

特にお中元お歳暮の付け届けは、客商売にとつては大きな意味を持つ。社長がリストアップする届け先はなんと百ヶ所を超えていて、眺めているだけで目眩がしそうだ。もちろん、その一軒一軒に三千円とか五千円の品を贈っていたら、あつという間に会社経営が破綻してしまうだろう。そこが社長の腕の見せどころ。私も入社して初めてそれを聞いたときは自分の耳を疑ったわよ。

品物を製造工場から市価の半値以下で仕入れてきたと思つたら、社員総出でラッピング。あれよあれよという間に、箱代まで合わせても千円にも届かないタオルセットがパートで五千円で売られている商品にも負けないくらいになってる。もしかして商売を変えた方がいんじゃないかと思うくらいだ。

そして、熨斗紙も伝票も手書き。とりあえず、伝票の差出人の方だけはパソコンで打ち出してもらってる。でも、宛名はどうしても手書きなんだって。その方が心がこもるからって、社長が言い張るのよね。今はそんなご時世じゃないと思うんだけど。

さらに届け先によって複数の宅配業者とゆうパックを使い分けるといふ念の入れよう。もちろんどちらも窓口持ち込みで割引をねらうのは当然ね。そう、毎回タオルとかシーツとかかさばるわりに重量がないものを選ぶのも重要なポイントのひとつだ。昔話じゃないけれど、どうせもらうなら大きいものの方が嬉しいのが人間の心理だもの。

入社試験の一次面接で着席したとたん、突然筆ペンを渡された。そして、その場に居合わせた面接官三名のフルネームを書き上げたら、即日で内定をもらえたのよね。あれにはびつくりしたけど、とにかく社長の人選はとて個性的で、すごいなと思う。学歴や経歴は全然関係ないんだよ。

普段であれば、大量の書き物を任せられるときには会議室を使う。まあ会議室についてあれよ、ふたり用の長机が六つあるだけの場所。営業部の手前の一角だ。大きな立て看板を書くときには机を全部畳まないと無理してくらい狭くて、ときには在庫置き場に使われることもある。で、そこを今は営業部が会議で使用しているから、私はここにうーん、たまには座り心地のいい椅子もいいわね。

半紙を広げて、大きく深呼吸。まずは自分の名前を書いてみる。書を習う上でも、一番多く書く四文字。知らない間に手に馴染んでいる。だけど、私の名前って、全体的にすごくバランスが取りにくいのよね。それだけに上手に書き上げたときは快感だけどね。一度、硯に筆を戻して、白い空間をぼーっと見つめる。そして「朝倉小鳩」という見慣れた名前の隣にもうひとりの名前を並べた。

——木原翔。

何だか、しつくりこないなあ。姓は画数が少ないのに下の名前が一文字の上に入り組んでいて、どうにか収めようとしたら妙に縮こまってしまった。ふう、と溜息をついて、くしゃくしゃと半紙を丸める。そのままゴミ箱にぽんっと投げ込んだ。

熨斗紙を広げて、蝶結びの上に「御中元」と書く。結び目の真下に、大きめに社長のフルネーム。そしてその右上にちよつと小さく会社の名前。決まり切った機械的な作業だけど、筆運びに集中する瞬間が好き。特に思いどおりの仕上がりになったときは、もつともつと嬉しい。

——我慢するの、やめよう。思い切り意地悪になって、とことんやりこめてやるんだ。綺麗に並んでいく熨斗紙を眺めながら、私は何度も何度も自分に言い聞かせてた。

お稽古ごとフリークのアキちゃん。週明けの月曜日は懐石料理のお教室だ。私も一緒に行こうってずっと誘われてるものの、今のところパス。だってその教室、有名店の板長が講師を務めてるだけあってすごいお月謝なのよ。アキちゃんは自宅通勤だから簡単に払えるんだろうけど、ひとり暮らしの私には無理無理。それにお懐石なんて習ったところで、将来絶対に役立ちそうもないしね。

そんなわけで、今日は退社後に何の予定も入ってない。さすがに定時ギリギリまで社長室に籠もりつきりで頑張ってた。残業しようなんて気分にはならなかった。まだ期日に余裕のある伝票書きは明日に回すことにする。

日中はどうにかもった天気も、夕方から崩れてくる。さすがに停滞前線は、そう簡単には引つ込んでくれない。「私がいるよっ！」って宣言するみたいに、灰色の空からぼ

つぽつと雨粒が落ちてきた。

「うわあ、来たか」

昨日と同じように、バッグから折りたたみ傘を取り出す。昨夜はホテルの部屋に広がっておいたから、明け方までにはすっきりと乾いていた。気に入ってるんだ、このさくらんぼ色。昔から傘を買うときには必ず明るい色を選んでる。モノクロームに煙った風景の中で、少しでも明るくいたいから。

一日サボった分、今夜は威勢良く洗濯機回すつもりなんだけど、これじゃお風呂場乾燥を使わないと、何日も部屋に干しっぱなしになりそうだわ。でもあれ、電気代すごいんだよな。

都会のひとり暮らしって、始める前は夢いっぱいだった。でも、実際はすっかり所帯じみちゃって嫌になる。スーパの値引きコーナーで野菜を吟味してる自分に気付いたときには、さすがにげんなりよ。ああ面倒、今日はホカ弁にしちゃおうかな……なんて思っていたら、三つ向こうのビルのひさしで、えんじ色の傘が動いた。

「……あれ？」

そこから現れた人影に、思わず立ち止まる。だって私にとっては、ものすごく意外な人だったから。そこまで言ったら失礼かと思うけど、……でもやっぱり。

「小鳩さん」

鼻先にくつついた雨粒を人差し指で拭いながら、樋口くんはホッとしたように笑った。「えと、……あの？」

確認の意味を込めて、私は彼の顔を覗き込んだ。雨がどんどんひどくなるから、近くまで寄らないと表情がわからなくなってる。頼りない街灯が、私たちの下にほんやりとした影を落とす。

「アキちゃんなら、今日は一緒じゃないよ？ ……聞いてない？」

てつきり、アキちゃんのことを待ってたんだと思った。でもなあ、今日の予定も確認し合っていないなんて変なの。それに、前もってアポをとっとけば、アキちゃんのことだもの、お教室なんてすぐにサボっちゃうと思う。自分にとつてその瞬間に何が一番大切かちゃんと認識できないようだったら、恋の駆け引きなんてできないよ。

そしたら、樋口くん。頼りなさそうに首を横に振る。額に貼り付いた髪の毛から、雨粒がこぼれ落ちた。

「違うよ、小鳩さんのこと、待ってたんだ」

細い輪郭、印象的な大きな目をくりくりさせて、彼は私をじつと見る。それだけなのに、何だか吸い込まれそうな気がして、背筋が寒くなった。……何、どうして？

樋口くんのことをちよつと意識したのは、彼が私のことをみんなと同じように「コバちゃん」って呼ばなかったからだ。そりゃ、ウチの会社に来てからまだひと月足らず

だもの。他人行儀なのは無理ない。もちろん、アキちゃんのことだって「秋音さん」だし。それでも、何となくこそばゆいような特別な気分になってた。

「……？」

すごく真剣な眼差しで見つめられてる気がする。気のせいだよ、そうだよ。嫌だな、ただ声をかけられて立ち止まっただけなのに、とても悪いことをしている気がする。

「なあに？ ……相談ごと？」

もしかしたらアキちゃんのことかなって、そう思ったから聞いてみた。でも樋口くんは、また首を横に振る。だだをこねる子供みたいに、そればかりを繰り返してた。

「違うんだ……、その」

一応、傘を差してるんだけど、それでも彼のスーツには次々に雨粒が降り注いでいく。ころんと丸まったしずくがぼろぼろと落ちて、街灯の明かりがそれをキラキラさせてた。「誤解しないで欲しいんだ」

私の目の前で、歩行者用の青信号がチカチカしている。彼じゃなくて、その隣の方を見つめていた。途切れ途切れの言葉たち。あまりにも断片的だからよくわからない。だけどこれ以上、樋口くんとは一緒にいない方がいい。何故かそんな気がした。私の内側で、警笛が鳴り響く。

「あの、私——」

急ぐから、という言葉を言い終える前に、私の左腕が掴まれてた。え？ ……どういうことっ!? 驚いて見上げた先にあるのは、あまりに真剣な彼の瞳。

——ちよつと、待って。これって、ヤバくない……?」

「昨日のことは秋音さんから聞いているよね? 絶対そうだ。そうに決まってる。今日の小鳩さんはすごく変だった。一度も俺の方を見なかっただろ。……正直、すげーシヨックだったんだけど」

ぎりつと、手首が音を立てる。ひよろりとした今風の若者のイメージなのに、信じられないほどのすごい力。怖いって、思った。あたりにはまだ明るさが残ってるし、人通りだって多い。だけど彼の唇がさらに次の言葉を吐き出そうとするのを目の当たりにして、私の全身にはざあっと鳥肌が立っていた。どうにかして話を遮りたいんだけど、言葉が出てこない。「誤解」って、何よ。意味わからないから。

——まさか、やつぱり……樋口くんって。

にわかに湧いてきた想いを慌てて振り払う。駄目でしょ、この人はアキちゃんがゲツトしようとして頑張ってる相手だよ。そりゃあ、ちよつとはいいいかなって思ってたけど、わざわざ取り合うほどじゃない。それに、はっきり言って、こんなの思いうがりでだよ。ああん、もうっ! どうして外れないの、この腕っ! このままじゃ、誰か知っている人が通りかかっちゃうじゃないの。

どうしようって困り果てていたそのとき、背後から雨を蹴散らして近づいてくる足音が聞こえてきた。通り過ぎていくのかなと思っただのに、それはすぐ側で止まる。

「ごめん、遅くなって」

明らかに、私に向かってかけられた言葉。ハツとして声の方を向いた樋口くんにならうように、私も振り返る。そして——そこに立っていた人物を見上げたとき、私の呼吸は止まっていた。

「帰りがけに、社長に呼び止められてしまったね。話がなかなか終わらないから、困ったよ」

聞こえたのは、どう考えても全速力みたいな足音だった。でも、目の前の人は息ひとつ乱れていない。いつもと同じようにゆっくりと落ち着いた語り口。そして当然のように、こちらに片手を差しのべてくる。

「待たせたね、——さあ、行こうか?」

するつと、束縛の解けた腕。私は必死に木原さんの手を握りしめていた。

「もう、ここまで来れば大丈夫でしょう」

そのままどれくらい歩いたんだろう。

気が付けば、駅前なんてとっくに過ぎていて、さらに線路に沿って次の駅へ続く道を

半分くらいまで歩いてきた。雨の遊歩道には人影もまばらで、聞こえるのは通りを過ぎていく車の音としとしと降り注ぐ雨の音だけ。隣を歩く人が、声を持っているということも、しばらくは忘れてみたい。

ゆるやかなアーチ型の橋を渡り幹線道路をひとつ越えたところに、誰もいない公園があった。その一角に、屋根付きのベンチを見つけた。座席は濡れていても座ることができないけど、ようやくこれで雨がしのげる。持ち続けた傘を脇に置いて、空いた片手で私は頬を拭った。

「……」

返事をする代わりに、鼻をすすり上げる。どうしてかわからなかったけど、涙が止まらなかった。まだ手をつないだままの私たち。大きくて厚みがあって、たっぷりとした彼の手のひら。すごくあったかくて、たまらなくなる。それが悔しくて情けなくて、色んな気持ちがちやごちやに降り積もっていく。

怖かった、本当に。樋口くんがいきなり別の人になっちゃったみたいで。あのままだら、どうなってたかわからないよ。……これって、やっぱり「助けられた」ってことになるんだろかなあ。

何でこの人がベストタイミングで現れたのか。してもいない約束をしていたように話しかけてきたのか。よくよく考えると疑問点はたくさんあるけど、あの状況では面倒な

ことを考えてはいらなかった。樋口くんの前から逃げられるのなら、手段なんて選んでいられなかったもの。借りを作ってしまったような気もするけど、仕方ない。

差し出されたときと同じように、自然に手が解かれる。自分の傘に付いたしずくを外に向けて叩き落としながら、彼は落ち着いた声で言った。

「さっきの、庶務に新しく来た派遣くんだね」

そして。

その素っ気ない言葉を聞いたとたんに、私の内側で信じられない変化が起こる。どんどん溢れていた涙も、ぴたっと止まっていた。すっきりと無駄のない横顔をじっと見据えながら、ごくりと唾を呑む。

「樋口くん、です。いくら部署が違ってからって、そんな呼び方は失礼でしょう」

私の声にも、木原さんは振り返る。瞳の奥がちよっとだけ揺れた。でも、それよりも私自身の方がもっとも驚いてる。確かに正論ではあるけれど、今のこの状況にはひどく不似合いな発言だと思う。でも、言わずにはいらなかった。

「恩を仇で返す」ってこういうことなのかな。窮地に立たされたところを、彼にスーパーマンよろしく救われた。こういう場合はまずは感謝の言葉を述べるべきだと思う。どんなに腹の立つ相手であっても。……だけど、我慢できなかったの。

だって、そうでしょ？

たった、三十人足らず。いくら年間を通して多少の入れ替わりはあるにせよ学校の一人クラス分にも満たないような人数でしょう。普通にしてたつて、いつの間にか名前くらい覚えられるものだと思うの。それなのに、この人は全く努力が足りない。というか、無関心すぎだよ。今に誰からも相手にされなくなっちゃうんだからね。わかっているの？ ウチの会社は、みんながいいから笑って済ませちゃうと思う。でも、いつもいつもそんな風に上手くいくはずないよ。営業を何年もやっていて、そんな基本的なこともからないのかな？

かたかたと、フェンスの向こうをレモン色の電車が通り過ぎていく。沈黙のまま、ふたりそれを見送っていた。やがて、口を開いたのは彼の方。

「あ、……そうだね。君の言うとおりで」

淡々とした口調ではあったけど、驚くほど素直に彼は自分の非を認めていた。その姿にまた、動揺している私がいる。必死にとげとげとした言葉を投げているのに、こんな風にあつさり受け止められてしまったら話が続かないじゃないの。もしかして、これも彼の作戦？ そうか、そうかもれないわ。

「わかったようなことを言つて。どうせ、今のも適当にこつちに合わせただけなんですよ？ 木原さんみたいな人、どうして取引先の方が信用するのかわからないわ。私、そういういい加減な人が一番嫌いです」

あ、馬鹿。何言つてるんだろう、私は。

別に好きとか嫌いとか、そんなの全然関係ないのに、どうしていきなりこんな風になっちゃうの。冷静なおトナの女は、絶対にボロは出さないはず。いいように突き崩されていくみたいで、腹立たしいつたらないわ。

「そうか、……それは困ったな」

そう言いつつも、全然困った顔なんてしてないじゃない。彼は額に手を当てて、しばらく何かを考えてるふりをした。——そう、格好だけに決まってる。絶対、この人って私のことを馬鹿にしてるもの。

だいたいさ、何よ、その態度。

昼間は一瞬とはいえあんなにうるたえていたくせに。ちよつといい格好して全部帳消しにするつもりでしょ？ 言っとくけど、私は見た目ほど甘くないからね。ただの小娘だつて思つたら、痛い目を見るんだから。だつて、だつて、私はね——

また一本、電車が通り過ぎる。車内灯に浮かび上がった四角い窓が流れていくのを見送つてから、彼はゆつくりとこちらに向き直つた。

「明日までに、社内の人間の全ての名前をフルネームで覚えてこよう。それでいいかな？」
鉄板面のひんやりした頬が、少しだけほころぶ。目の錯覚かもしれないけど、一瞬、そんな風に見えた。

「さあ、これで満足してもらえたかな？」

彼がゆっくりと腕を上げると、手首に巻き付いた時計がちやりつと音を立てる。鼻につくほど得意気に聞こえる言葉なのに、やはりいつもどおりの無表情。そんな顔を、私はただ呆然と見つめていた。

昨日の別れ際、駅のホームで渡された名刺。その裏には午後六時という時間とお店の名前が書いてあった。

会社を出て、駅とは反対方向にしばらく歩いたところにあるコーヒー専門店。シツクな外観がとても素敵だなと思っていたけど、まだ入ったことはなかった。アキちゃんが紅茶党だっていうのもあるし。

「何かあったら、携帯の方に連絡して」

とか言われて、すごくカッコつけてるって腹が立った。もしかして、私が出向くのが当然かと思っただけかな？ それは違うよ。どうして私が木原さんに従わなくちゃならないの。絶対絶対、そんなのって許せないって思ったのに……何で、のこのこやってき

ちゃったんだろう。

正直、ここまで完璧だとは思ってなかった。

彼は部署ごとにすらすると全員のフルネームをそらんじたかと思うと、次に胸のポケットから手帳を取り出して後ろのメモスペースを開く。そして、私にひとりひとりの名を確認しながら、ボールペンで書き記していった。

たとえば「斉藤」さんの場合、本当は「齋藤」だったり「齊藤」だったり何通りもある。「渡辺」さんも同様。そういうのを気にしない人もいるけど、こだわりを持つてる人も多いよね。やっぱり間違えたら失礼かなと思う。耳で聞くだけじゃ取り違えてしまいそうな漢字を、彼はどこまでも正確に書き上げた。副社長の「富太郎」って名前が「富」じゃないところも正解。

まあ、やってできないことじゃないと思う。それなりの気力さえあれば。

でも、木原さんは今日も一日中外回りだったはず。またひとつ契約を取ったって、営業で噂になってたよ。今日の行き先はここから電車を乗り継いで三時間以上かかる茨城の店舗だって聞いた。ざっと計算しても一日がまるまる潰れる計算だわ。あんな口約束、絶対に忘れてると思っただのに、あっさりやってのけちゃうなんて、一体どうなってるの？

……すごく、悔しい。

「だって、さ。きつと、同じことを今この場でやれて言われたら、私には多分無理だと思う。彼が私とは全然頭の構造が違うエリートだということをはっきりと見せつけられた気分だわ。どうにかしてこちらが優位に立って振り回したいって思うのに、ことごとく玉砕してしまうみたい。敵に不足はない、どころか……最初から太刀打ちできない相手だったのかな。」

このままでいたら、きつとあつという間に突き崩されちゃう。そんなのは、絶対に嫌。ああ、やっぱりここには来ない方が良かったんだ。その方が思わせぶりで悪女っぽかったのに。私の連絡先なんて知らない彼が、待ちぼうけを食らうシーンを想像するのも乙なものじゃなかったかしら？

紫外線よけなのか、外から見ると少しスモークがかかっている窓。窓際の席に彼がすでに座っているのを見て、何となくドアを押してしまったんだ。私って、かなり馬鹿かも。こういう風に頭の回る人間には、やみくもに立ち向かったって勝機はないわ。昨日のことだって、やっぱりひとことくらいお礼を言った方がいいかと思っただけ、やめる。絶対に頭なんて下げてやらない。

「……何だ、やればできるんじゃないですか」

すごく突き放した言い方。私にしてはかなり完璧にできたと思う。カップに半分残っていたカプチーノはすっかり冷え切っていたけど、それを一気に飲み干す。

「美味しいコーヒーをこちそうさまでした、ではこれで失礼します」
なるべく、顔を崩さないように。

そう心がけたつもりだけど、自信はない。私はそれだけ言うと、バッグを手に席を立った。彼の方を、意識して見ないようにして。

子供の頃から、対人関係のトラブルには縁のない生活をしてきた。

とくに女の子同士付き合えば、陰湿で粘着質になりがちだって聞くけど、私の周りはどうでもなかったな。どんな場面でもそれなりに上手く渡っていたと思う。だって、努力してたもの。

小さな頃、ウチにはお祖母ちゃんが一緒に住んでいた。

私が小学生の頃に病気で死んじゃったけど、それまではとても賑やかだったな。いつも何人ものお友達が遊びに来ていて、南の縁側でおしゃべりに花が咲いていた。両親が共働きだったから、日中はいつもお祖母ちゃんと一緒。明るい笑い声の中で、折り紙を折ったり絵本を読んだりしながら、過ごすのが好きだった。

「女の子はそこにいるだけで華なんだから、いつもにこにこ笑ってなさい。何か言われたら、すぐに『はい』と返事するんですよ」

決して厳しい人ではなかったけど、それだけは繰り返し繰り返し言われた。だけど、

お祖母ちゃんが言うことなら正しいって、小さな私でもちゃんとわかっていたよ。だって、お祖母ちゃんはいつも幸せそう。お友達がたくさんいて、楽しそうに笑っていて、知らない人でも吸い寄せられちゃうような、ほんわかしたイメージがあった。

お祖母ちゃんみたいにしていれば、間違いない。そう信じて、一生懸命真似をした。学校で友達と遊んでるときも「お祖母ちゃんだったら、どうするかな？」っていつも考えてた気がする。仲間はずれになるのは怖い。ひとりぼっちは嫌。お祖母ちゃんが死んじゃったあと、学校から帰っても家の中は静まりかえっていて、本当に悲しかった。

きっと友達がなくなったら、みんなから嫌われたら、ずっとあんな気持ちで過ごさなくちゃならないんだ、って。

お祖母ちゃん子で育った私は、目上の人からとても可愛がられた。部活の先輩も学校の先生も短大の教授も。誉められれば嬉しいし、もっともっと頑張ってしまう。周りの人が気持ちよく過ごせるように考えていけば、どうしても自分の気持ちは二の次になったりする。でも、そんなこと少しも苦にならなかった。

それなのに、ずるい。

世の中には木原さんのような人間が、確かに存在する。仕事ができれば、周囲に無関係でもきちんとして認められて、ちゃんと社会の一員としての生活が成り立ってる。

ずるい、ずるい。すごく、ずるい。

閑散とした裏通り。一刻も早く彼から遠ざかりたい。喫茶店を出てからずっとそう願っていた。

湿り気を含んだ風。梅雨時は空も空気もよどんでいて、それだけで憂鬱な気分になる。そういうときは、できるだけ楽しいことを考えて、うきうきするように心を変えていかなくちゃ。つまらなそうな顔をしてたら、きっと周りの人たちまで嫌な気持ちになっちゃう。無理だと思っても、笑わなくちゃ。そうしなくちゃ、駄目なんだ。……でも、今はどうしても無理。

ぽつんぽつんと雨粒が落ちてくる。いつものようにバッグを探ったのに、今日は傘を忘れていた。

「……やっど、追いついた」

頭の上に、丸い傘の影が落ちる。後ろから足音が近づいていたことにも気付かなかった。「君、歩くの速いね。一体、どこまで行ってしまうのかと思ったよ」

——やっぱり、嫌いだって思う。この人、すごく気に入くない。

「私、『君』って名前じゃありません。木原さんって、結局のところ何もわかってないじゃない。とても失礼な人だわ」

意地悪なとげとげした言葉が、次から次へと飛び出してくる。私、どうしちやったん